台大日本語文研究第 47 期
2024 年 06 月，頁 69-98
2024-03-28 收稿，2024-05-15 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202406_(47).0004

阿波德島藩的儒教喪祭禮儀及其儒者們

田世民*

摘要

蜂須賀重喜（1738-1801）是出羽久保田新田藩（今秋田縣）藩主佐竹義道的四男，被第九代德島藩主蜂須賀至央收為繼位養子，出任該藩第十代藩主。重喜繼任藩主後大力著手藩政改革。重喜因崇尚儒學，有意實行儒葬，遂在明和三年（1766）選定德島城西南約 2.4 公里處眉山丘陵的佐古山為一族的墓域。並且，取祈願一族長壽、萬年不變而永續之意，命名為「萬年山墓所」，又名為「御墓山」。蜂須賀家菩提寺興源寺裡亦有墓所，奉祀歷代祖先之墓。重喜開設萬年山之後，興源寺墓所則轉型為僅埋葬遺髮的「拜墓」，並與萬年山的「埋葬墓」共存，成為獨特的兩墓制。

本文將探討阿波德島藩儒教禮儀的形成及開展，並且考察其儒教禮儀如何受到水戶藩的影響。接著，考察德島藩儒柴野栗山與水戶藩儒立原翠軒之間的書信往來中如何就喪祭禮儀進行討論。並且，考察栗山之子碧海如何克紹箕裘，善盡藩儒的工作。還有，探討其他儒門諸氏如何參與德島藩的喪祭禮儀。最後，從近世藩國大名實踐儒禮的角度思考阿波德島藩的定位。

關鍵詞：阿波德島藩、儒教喪祭禮儀、蜂須賀重喜、柴野栗山、立原翠軒

臺大學術期刊資料庫

* 國立臺灣大學日本語文學系副教授

The Confucian Funeral Rituals of Awatokushima Domain and its Confucian Scholars

Tien, Shih-min*

Abstract

Hachisuka Shigeyoshi (1738-1801), the lord of Awatokushima Domain, admired Confucianism and intended to carry out Confucian burials, he selected Mount Sako in the Bizan Hills, about 2.4 kilometers southwest of Tokushima Castle, as the clan's burial site. Moreover, it was named "Mannen Mountain Tomb Site", in order to pray for a long life, unchangeable and eternal life for the family.

This article explores the formation and development of Confucian funeral rituals in the Awatokushima Domain, and examines how its funeral rituals were influenced by the Mito Domain. Next, it examines how Awatokushima Confucian scholar Shibano Ritsuzan and Mito Confucian scholar Tachihara Suiken discussed funeral rituals in their correspondence. Also, examines how Hekikai, the son of Ritsuzan, carried on his father’s position and performed the work of the Confucian scholar well. Then, explores how other Confucian scholars participated in the Awatokushima Domain’s funeral rituals. Finally, it considers the positioning of the Awatokushima Domain from the perspective of the early modern feudal lord’s practice of Confucian rituals.

Key words: Awatokushima, Confucian funeral rituals, Hachisuka Shigeyoshi, Shibano Ritsuzan, Tachihara Suiken

臺大學術期刊資料庫

* Associate Professor of Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

阿波徳島藩の儒教葬祭儀礼とそれを支えた儒者たち

田世民*

要旨

蜂須賀重喜（1738-1801）は、出羽久保田新田藩の佐竹家から阿波徳島藩の末期養子として迎えられ、10 代藩主に就任した。そして、自らが中心となって藩政改革を行った。1766（明和 3）年、儒学を尊崇する重喜は儒葬を行うべく、領内の眉山丘陵の佐古山に墓域を定め、「万年山墓所」（「御墓山」とも）を造営した。他方、蜂須賀家の菩提寺興源寺には歴代の墓所があるが、万年山墓所が造営された後、興源寺墓所は遺髪を納める拝み墓として、埋め墓の万年山墓所と併用されて両墓制が成立した。

本稿は、阿波徳島藩の儒教儀礼がいかに形成し展開されていったのかを取り上げる。次に、同藩の儒教儀礼が水戸藩のそれにいかなる影響を受けたのかを探究する。さらに、同藩の柴野栗山と水戸藩の立原翠軒の交友と葬祭儀礼をめぐる議論を考察し、柴野碧海が栗山の職務を受け継ぎ藩儒として活躍していたあり様を見る。そして、阿波徳島藩の儒者諸氏がいかに葬祭儀礼に関わったのかを検討する。その上で、近世大名家の儒礼受容の広がりとしてその位置づけを捉えてみる。

キーワード：阿波徳島藩、儒教葬祭儀礼、蜂須賀重喜、柴野栗山、立原翠軒

臺大學術期刊資料庫

* 国立台湾大学日本語文学科准教授

阿波徳島藩の葬祭儀礼とそれを支えた儒者たち

田世民

一、はじめに

蜂須賀重喜（1738-1801）は、出羽久保田新田藩（現秋田県）の佐竹家から阿波徳島藩九代藩主・至央（1737-1754）の末期養子として迎えられ、至央の亡き後に十代藩主に就任した。重喜は藩内の財政を立て直すために、自らが中心となって藩政改革を行った。また、重臣の集堂学山（1700-1784、名は元成、別号に迂亭）の学校建設の議を受け入れて進めようとしたが、機運が熟せぬせいか実現しなかった。1766（明和 3）年、儒学を尊崇する重喜は儒葬を行うべく、領内の眉山丘陵の佐古山（現徳島市南佐古四番町）に蜂須賀一族の墓域を定め、「阿淡二州太守族葬墓域」という石碑を建てた。一族の長寿、万年変わらず永らえることを寿ぐ意で「万年山墓所」と名づけ、また「御墓山」とも呼ばれた。他方、蜂須賀家の菩提寺興源寺には従来から歴代の墓所が存在していたが、万年山墓所が造営された後には、興源寺墓所は遺髪を納める拝み墓として、埋め墓の万年山墓所と併用されるようになり、阿波徳島藩（以下、徳島藩と略称）の両墓制が成立した。さらに、1780（安永 9）年に重喜は蜂須賀家の祭祀を儒法に改めて城内に祠堂を設え、そして初代藩主・至鎮を「太祖」（孝公）として祀り、儒官による祭祀がなされるようになった[1]。

桑原恵は上記した「阿淡二州太守族葬墓域」の碑文を考察し、養子として入封した重喜は儒葬を行うことによって歴代の藩主に忠孝・忠誠を示そうとして、次のように指摘している。「重喜は、儒葬を重視しつつも仏寺参詣を軽視しない。このことに筆者は、歴代藩主の意志の継承をあらゆる方法を用いて領民や家臣に示そうとする

臺大學術期刊資料庫

1 露木亀太郎『蜂須賀家之祭祀法（神佛儒）縁由』（露木亀太郎発行、1936 年）、頁数無表示。

重喜の強い意志を感じ取ることが出来るように思う」[2]。さらに、蜂須賀家に対する忠実な継承者を目指した重喜にとって、「万年山の開択は、そのために実施されたものであり、実は歴代藩主の藩政の継承を明示しつつ、藩政の改革を実現するための装置でもあったのである」[3]と述べる。また、安達洋は徳島藩藩儒との関わりで同藩の葬祭儀礼の実践について、次のように指摘する。「このことは、一〇代重喜の儒教に対する強い信奉と、重喜以降の藩主の儒教への態度や「萬年山」と藩儒を媒介とした藩民統制への志向を示していると考えることができる」[4]という。安達によれば、徳島藩の葬祭儀礼に携わった儒者に、合田家と立木家をはじめ、増田希哲・柴野惟喬・岡本知充らがいるという[5]。ちなみに、安達は大和武生[6]による分類を参照し、史料『蜂須賀家家臣成立書并系図共』の記載に基づいて、徳島藩藩儒の職務を①学問指導、②儒教式葬儀祭儀の担当、③学問所における講義・出版と3種類に分けている[7]。

筆者の関心は阿波徳島藩における儒教葬祭儀礼の形成と展開にあるが、重喜の儒葬による政治的意図に関する上記の指摘は傾聴すべきである。最近、近世日本における儒教儀礼の受容に関する研究が進んでおり、また考古学による近世大名の葬制についての研究蓄積も厚い[8]。しかし、阿波徳島藩の葬祭儀礼を取り上げる研究が少なく

---

2 桑原恵「養子藩主の祖先祭祀～万年山墓所をめぐって～」(『史窓』46、2016年)、68頁。

3 桑原恵「養子藩主の祖先祭祀～万年山墓所をめぐって～」、69頁。

4 安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」(『鳴門史学』25、2011年)、32頁。

5 前掲安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」、34頁。

6 大和武生は、徳島藩の儒学者たちを地誌・年譜等の編集者、政治顧問、教育者と三形態に分類して、それぞれの役割について述べている。大和武生「近世阿波の学問と儒学者」、渭陽会編『東洋の知識人―士大夫・文人・漢学者―』(京都：朋友書店、1995年)、243頁以下参照。

7 安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」、28頁以下参照。

8 例えば、吾妻重二の近世儒者や大名家の儒礼受容に関する諸論考や、日本の『家礼』文献を集めた労作『家礼文献集成　日本篇』一～十二(大阪：関西大学出版部、2010～2024年)が代表的である。また、近世儒者の『家礼』受容に関する最新の研究書には、松川雅信の『儒教儀礼と近世日本社会――闇斎学派の『家礼』実践』(東京：勉誠出版、2020年)がある。近世大名の葬制の考古学的研究については、松原典明『近世大名葬制の考古学的研究』(東

[9]、そして後述の「阿波国徳島蜂須賀家文書」を考察するものは管見の限り皆無である。

ここでは、阿波徳島藩の儒教葬祭儀礼がいかに形成し展開されていったのかを取り上げる。そして、徳島藩の葬祭儀礼が水戸藩のそれにいかなる影響を受けたのかを検討する。さらに、徳島藩の儒者たちがいかに葬祭儀礼に携わり、そして藩士たちとともに同藩の儀礼制度を支えていたのかを見る。その上で、近世大名家の儒礼受容の広がりとしてその位置づけを捉えてみる。

二、阿波徳島藩における儒教葬祭儀礼の形成と展開

万年山墓所（「御墓山」）は、徳島城跡の南西約 2.4km、眉山丘陵の佐古山に造営された。中腹の標高 170m 地点には、高さ約 3m、幅約 8m の「阿淡二州太守族葬墓域」という石碑がある[10]。碑文には、蜂須賀重喜がこの墓所を造営させた目的についてこのように書かれている。「歩毎に炭を埋む。葬むるに必ず礼を守りて、浮屠を用いず。嗚呼身は父母の遺体、豈に之を軽忽にすべけんや。因て此の石を建て、後嗣と国人をして寡人之志を知らしめんとす。／明和三年歳次丙戌冬十一月」。また、その後ろに同藩の重臣 4 名が連名で次の言葉を載せている。「忠孝は人の本にして、終りを慎み、遠きを追うは、其の至要なり。然るに、世の人君、其の生くるには、富貴の養を受け、夏涼しく、冬暖かくして、綺羅身を蔽う。身其の死すれば則ち、水骨を湿し、土膚に親しくす。臣子、恬然として敢えて、哀痛せず。其れ何の心也。今吾が君、塋域を択び開き、臣子をして慎終之道を

京：雄山閣、2012 年）、同編著『近世大名葬制の基礎的研究』（東京：石造文化財調査研究所、2018 年）、同編『近世大名墓の考古学――東アジア文化圏における思想と祭祀』（東京：勉誠出版、2020 年）などに詳しい。

9 徳島藩蜂須賀家の儒教葬祭儀礼の受容については、藪田貫「近世日本における儒教と儒葬墓について―徳島藩蜂須賀家の万年山儒葬墓を中心に―」（吾妻重二編『泊園記念会創立五〇周年記念論文集』、関西大学出版部、2011 年）や、前掲桑原恵「養子藩主の祖先祭祀～万年山墓所をめぐって～」がある。

10 万年山墓所と石碑の所在地については、徳島市教育委員会社会教育課編『史跡徳島藩主蜂須賀家墓所保存整備計画書』（徳島：徳島市教育委員会、2005 年）、12 頁参照。

尽さしめんと欲す。厚きと謂うべし矣。臣等久しく国恩を受け、世々重職を汚す。往日を顧視するに、其の頽に泚有り。臣等及吾子々孫々、吾君の厚徳、以て謹んで奉じ、遵い守らざるべからざるを明らかに知る也。謹んで碑陰に記し、以て無窮に貽さんとす」[11]という。

上記碑文中の「身は父母の遺体」という文言は、『礼記』祭義篇や『呂氏春秋』などの古典に由来するが、孔子の弟子の曽子が孝の思想を説いた言葉である。ここでは、重喜は父母から頂いた身体を大事にして、葬儀を儒教儀礼に従って行い、仏式を使用しないことを後世の人々に示そうとしていることが見て取れる。また、「終りを慎み遠きを追う」(『論語』学而篇)や「土をして膚に親しましむる無し」(『孟子』公孫丑下)などの孝概念を説いた言葉は、上の重臣たちの文章にもよく表れている。

さて、最初に万年山墓所に葬られたのは重喜の早世した長女・簾(みす)であり、墓所が竣工した間もない時に亡くなり、1766(明和3)年11月に埋葬された。墓銘は「秋露嬢之墓」である。そして、墓所に埋葬された最初の藩主は八代の宗鎮(1721-1780)[12]で、墓銘は「故阿淡二州太守源僖恵公之墓」である。なお、後にも述べるように、1801(享和元)年に逝去した重喜の墓銘は「故阿淡二州太守源元公之墓」である。

万年山墓所が整備された後に行われた初期の葬儀はみな儒式によって行われたと推定されるが、現在のところそれを確認できる史料がないため、儀式の実態が分からない。葬儀とその後の祭儀に関する記録が見られるのは、十代藩主重喜の葬儀以降である。例えば、重喜の葬儀に関わる記録は「元公様御収御用掛奥御小姓手許控(一、二)」があり、そして重喜と重喜夫人の祭儀記録として「元公様元夫人様御祭儀奥小姓手許控(三〜六)」がある。これらの史料は現在、

[11] 以上、原漢文。読み下しは前掲桑原恵「養子藩主の祖先祭祀〜万年山墓所をめぐって〜」、63頁に載ったものに拠る。ただし、文中の「顧視往日」とある箇所を「顧、往日を視るに」と読み下されているが、上記のように書き換える。

[12] 前掲『史跡徳島藩主蜂須賀家墓所保存整備計画書』、12頁。

臺大學術期刊資料庫

国文学研究資料館の収蔵歴史アーカイブデータベースに「阿波国徳島蜂須賀家文書」として収蔵し、デジタル化された画像が公開されている[13]。それらによって、重喜以降の蜂須賀家の儒式葬祭儀礼の様子を知ることができる。以下、時系列で重喜の葬儀記録の概要を見ておく。

蜂須賀重喜は 1801（享和元）年 10 月 20 日に逝去し、享年 64 であった。出棺するまでの供え物として、20 日に「御粥」[14]が上げられ、21 日から「一汁二菜」（427）の御膳が上げられた。22 日に御墓山で「御地祭」が行われ、土地の神に墓所造営を報告する「祝文」が読まれた（429）。同日に「御沐浴并御小斂之御用意」（430）、つまり衣服を改める準備がなされた後に「御飯含」（434）の儀式が行われた。その後、納棺の「大斂」（437）や、桐の「内棺」（440）が用意されるなど、着々と出棺の準備が行われた。亡き重喜の姓名・官位などを記し、柩の南のほうに寄せられる霊の依り代「銘旌」は、「故従四位下侍従阿淡二州太守大炊頭源元公之柩」（449）と題される。そして、菩提の興源寺から差し上げられた「御尊号」は、「**乾亨院**殿故阿淡二州太守従四位拾遺貞道泰元大居士」[15]（450、太字は筆者）である。

11 月 6 日の出棺前日に、喪主がその旨を報告するための「祖奠」が行われ、「二汁七菜」（504）の御膳が上げられた。その後、「初献」「亜献」「終献」「侑食」（505-6）などの儀式があった。

---

[13] そのアドレスは http://base5.nijl.ac.jp/~archicol/eachpage/07/01/ac1952001.01/index.html である。なお、「元公様御収御用掛奥御小姓手許控」という史料とほぼ同様の内容を持つもう一つの史料があり、それは「元公様御収御用掛奥御小姓手許控　壱」と「元公様御収御用掛奥御小姓手許扣　二」である。また、重喜以降の藩主の葬儀記録なら、穆公（11 代藩主治昭）、景公（12 代藩主斉昌）、戴公（13 代藩主斉裕）、そして最後の 14 代藩主で明治に入って侯爵となった茂韶のものがある。

[14] 「元公様御収御用掛奥御小姓手許控　一」（国文学研究資料館の収蔵歴史アーカイブデータベース「阿波国徳島蜂須賀家文書」）、画像番号 426。以下、同史料からの引用は括弧に画像番号だけを記す。

[15] のち、興源寺の重喜の墓銘は「**謙光院**殿故阿淡二州太守従四位拾遺貞道泰元大居士」と改められた。1801 年（享和元）12 月 13 日の記録に、「御院号御文字謙光院様之御書改二付」云々とある。「元公様元夫人様御祭儀奥小姓手許控三」、画像番号 151。

翌7日に、祖先に暇乞いの意を告げるための「御朝祖」が行われ、二汁五菜の「御遣奠」が上げられて、出棺の儀式に移った（506-510）。墓所に到着した後、「御霊幄之御式」として下記のように神主を題する儀式が行われた。

陥中式

故従四位下侍従兼阿淡二州太守大炊頭源元公諱重喜字公熙神主

但兼而認メ置。御神主之主ノ字上ノ点残シ置□（二字不明――引用者注、以下同）而点ヲ仕。

粉面式

顕考　　源元公　　神主[16]

題主の儀が終わったら、神主が成立した旨を報告する祝文が読まれ、喪主をはじめ一同が拝礼した。以上は出棺・題主までの重喜葬儀の様子である。この後、霊座で5度にわたって死靈の平安を祈るための「虞祭」が行われる。これは『礼記』雑記下の「士三虞、大夫五、諸侯七」に従うものであると考えられる。そして、1803（享和3）年10月20日の「大祥」（三周忌）祭までの一連の祭儀記録が続く。

ここで注意したいのは、なぜこのような葬儀記録をつけていたのか、ということである。重喜が生前に記録を残すようにと命じた可能性も否めないが、実際にそれを書かせたのはその子の治昭（1758-1814、十一代藩主）である。幼少の頃から大儒柴野栗山（1736-1807）の侍講を受けた[17]治昭は、父重喜と同様に儒教的礼制の意味を十分理解していた。ゆえに、次の葬祭儀礼のために参照できるように、葬儀次第の控えとして残させたものであろう。現に、治昭や斉昌（十二代）、斉裕（十三代）の葬儀記録を見る限り、明らかに元公のそれよ

16 「元公様御収御用掛奥御小姓手許控　二」、画像番号516。下線は筆者。

17 竹治貞夫「阿波の藩学」（『徳島大学国語国文学』2巻、1989年）が次に述べたことが参考になる。「歴代藩主中、英邁好学でその在職期間も長期にわたり、自ら文武の治政に精励したものは、十二代治昭、十三代斉昌の父子二代を最とするが、栗山は世子侍読として治昭公を十二歳の時から輔導啓沃し、その嗣碧海は斉昌公を九歳の時から養育薫陶した。この両名君を養成した柴野氏二代の功績は、特筆に価するであろう」（9頁）。

り形が整っており、儀式に関する挿図も充実しているなど叙述が詳細である。

三、題主儀をめぐって

先に重喜葬儀の題神主のくだりを引用したが、ここではその下線部に注目したい。つまり、神主は予め認めておくが、「主」の字の上の点だけを書かずに残しておく。墓所でその点をつけて題主儀を完成させるのである。実は、このような「点主」儀は、儒教的礼制の面において徳島藩の先蹤ともいえる水戸藩でも見られるものである。例えば、徳川光圀（1628-1701）葬儀の題主儀では「（梅村）源七、先陥中の点をうち、次ニ粉面の点をうち」[18]とあり、主の字の点が題された。また、光圀が藩士たちに頒布した葬祭儀礼のマニュアル書『喪祭儀略』の改訂本には、次のような叙述がある。「墓地ニテ急ニ書クハ、書損シモアルベシ。故ニ初ニ陥中粉面トモニ書シテ、只主ノ字ヲ上ノ一点ヲ残シオキ、此時ニ初ノ陥中ノ主ノ字ヲ、上ニ点ヲ題シ、次ニ粉面ニ題シ、礼ヲ行フヘシ」[19]という。なお、水戸藩の点主儀は、朱舜水を通じて喪祭儀礼をめぐる明文化の取り入れの一環である[20]。徳島藩の題主儀がそのことを意識して取り入れられたものなのかは不明であるが、水戸藩のそれを参考にしたのは確かである。

ところで、この墓所で行う点主儀は重喜葬儀の記録にのみ見られ、治昭以降の葬儀記録には見えなくなる。それに対して、一周忌の「小祥」に正式の神主（「栗主」）改題の儀があるが、そこで点主が行われたのである。例えば、治昭葬儀の題主儀では、「題主之人書畢る後、

---

18 水戸史学会「史料翻刻『慎終日録』」（水戸市学会『水戸史学』56号、2002年6月）、93頁。同様な記録は『義公葬儀注』にも見える。徳川真木監修・徐興慶主編『日本徳川博物館蔵品録II　徳川光圀文献釈解』（上海：上海古籍出版社、2014年）、97頁（鍋島亜朱華執筆）。また、田世民『近世日本における儒礼受容の研究』（ぺりかん社、2012年）、141頁。

19 前掲田世民『近世日本における儒礼受容の研究』、140-141頁。下線は筆者。

20 田世民『近世日本における儒礼受容の研究』、142頁。また、吾妻重二「水戸徳川家と儒教儀礼―葬礼をめぐって―」（『東洋の思想と宗教』25、2008年）、15-16頁参照。

臺大學術典藏資料庫

祝之役御木主ヲ御喪主様之方江奉向」[21]とあるが、点主の記録が確認できない。しかし、小祥祭の前日の神主改題ではこのようにあり、点主儀が行われたのを確認できる。

同（三月）廿三日

一　明日小祥御祭ニ付、柴野平次郎（碧海）罷出、御栗主ニ改題奉仕上候。

但陥中并粉面之主之字之一画ヲ残置、御当日御霊座之御前ニ而一画奉加候事[22]。

また、斉昌葬儀の題主儀でも点主の記録がなく、小祥祭の前日の記録には次の通りである。「（九月十二日）明日小祥御祭ニ付、御儒者立木和三郎御表御居間二ノ御間江罷出、御栗主御改題仕上置。尤御栗主之御陥中并粉面之主之字一画残置、御当日御霊座之御前ニ而一画ヲ奉加候事」[23]と、小祥祭に点主が行われたのである。

治昭と斉昌との葬儀の際に点主の記録がないと先に述べたが、果たして点主が行われなかったのか、それともただ記録にそれを明記しなかっただけなのか、そのことを判断する材料はない。ただし、上の水戸藩の『喪祭儀略』に「墓地ニテ急ニ書クハ、書損シモアルベシ」とあるように、墓所で題主を丁寧になしえないことから、神主を認めておいて墓所では点主のみが行われた。ゆえに、徳島藩での点主儀もさぞ丁重さを配慮しての措置であろう。

四、柴野栗山と立原翠軒の往来書簡にみる葬祭儀礼の議論

前述のように、重喜は1766（明和3）年11月に佐古の万年山に蜂須賀一族の儒式墓所を建設した。また、重臣の建議を受け入れて藩内子弟を教育するための学校を作ろうとした。翌年（1767）、重喜は

---

21 「穆公様御収御用掛奥御小姓手許扣　二」（国文学研究資料館の収蔵歴史アーカイブデータベース「阿波国徳島蜂須賀家文書」）、画像番号091。なお、重喜の小祥祭の神主改題では、墓所での儀式と同様に題点が行われた。「元公様元夫人様御祭儀奥御小姓手許控　三」、画像番号226参照。

22 「穆公様御収御用掛奥御小姓手許扣　三」、画像番号269。

23 「景公様御収御用掛奥御小性手許控　三」（国文学研究資料館の収蔵歴史アーカイブデータベース「阿波国徳島蜂須賀家文書」）、画像番号365。

名儒の柴野栗山（1736-1807）を招聘した。栗山は若い頃江戸の昌平黌に遊学し、大学頭の林榴岡（1681-1758、林家の四代目）の門下で学んだ。その後、京都に遊学し、国学者の高橋図南（1703-1785）について朝廷の有職故実を習った。この時の学習歴は後日、栗山が幕府に仕えて老中の松平定信（1758-1829）の皇居修復事業に協力することに活かされた。

さて、徳島藩に招聘されることが決まった栗山であるが、1768（明和 5）年の春に一旦故郷の牟礼（現香川県高松市牟礼町）へ帰省してから、同年 7 月に世子（重喜長男の治昭、後の十一代藩主）の侍講を務めるために江戸へ向かった。栗山は徳島に数か月ほど滞在した後、江戸か京都に居住した形で藩儒の職務を果たした。治昭は栗山の啓沃を受けて育ち、後に蜂須賀氏歴代中屈指の賢君となったという[24]。1780（安永 9）年 8 月 27 日、八代藩主宗鎮が逝去し、栗山は儒臣として徳島へ急いで赴き、そして「阿波僖恵公誄」を作って宗鎮の諡号「僖恵」の由来を述べた[25]。

柴野栗山は重喜以下徳島藩の人びとの信頼を受けたのみならず、水戸藩六代藩主・徳川治保（1751-1805）にも目を掛けられた。そのほか、水戸藩の藩士で後に彰考館の総裁を務めた立原翠軒（1744-1823）との交友も厚く、常に書簡などを通じて往来し意見や情報の交換をしていた[26]。ここで注目したいのは、栗山と翠軒はその往来書簡の中で木主（木製の神主）や石碑など葬祭儀礼に関する事柄について議論をしていた、ということである。

---

[24] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』（東京：風間書房、1989 年）、312 頁。

[25] 誄文は死者生前の功業を称えるために書かれるものであるが、そこには次のようにある。「嗚呼哀哉、日月不居、大事無退、霊駕将遠、荼毒百倍。赫赫阿淡、為師為君、不解于位、十有六年、偉哉大行。式受大名、以副臣民、思慕之誠、謀諸史官、又詢耆徳、僉曰維公、小心翼翼、不亦僖哉。四方為則、又曰柔質、受諫愛民、継之曰惠、何有間然」という。宮脇仲次郎編『訓点栗山文集』（高松：宮脇仲次郎発行、香川県丸亀中学校蔵版、1906 年）、巻之四、25 丁裏。

[26] 栗山が詩会などの集いを通じて翠軒などの儒者や文化人と交遊したことについては、田世民「近世日本知識人的遊學與社集——以柴野栗山及其交遊網絡為例的探討」（張藝曦主編『結社的藝術：16-18 世紀東亞世界的文人社集』、台北：聯經出版、2020 年）、355-389 頁を参照。

木主

例えば、立原翠軒から木主について尋ねる書簡が来たが、その返書に栗山はこのように述べている。

> 三年喪自天子達庶人故、神主も上下無等とハ申されましく候。現在天子ノ主ト后ノ主と諸侯ノ主なとハ『通典』なとニ夫々わかり有之候へ共、一様とも申されましく候。其上銘旌等皆降殺以定説ニ而、主斗同し事と申ハ不遍之様ニ奉存候。貴藩西山公御須行之『喪祭儀略』ニ而御藩中一統御遵行被成候事ニ御座候ハハ、是非御国制ニ御従ひ至極尤ニ奉存候。是ハたとひ外ニ明解有之候共御国制ニ御背も披成候而ハ不可然御義と乍慮外奉存候。僕義ハ『朱子語類』之説ニ従ヒ一向寸法なし見合ニ作り、尤陥中も無之候。只位板と致候而用ひ申候。是も不得已事故如此御座候。外ニ鄙見も無之候[27]。

その要点を整理すると、次の通りである。

（1）唐の杜佑『通典』によれば、木主の寸法は身分により差等があるべきものとされ、一概に同じであるわけではない。

（2）栗山においては、水戸藩に既に西山公（徳川光圀のこと）から藩士たちに頒布された葬祭儀礼のマニュアル書『喪祭儀略』が存在する以上、ほかに「明解」があるような形式を求めるより、その「国制」すなわち水戸藩の制度に従ったほうがよいのではないか、という意見である。

（3）栗山自身は木主に関して基本的に『朱子語類』にある通りに従っているが、寸法については特に拘らなかった。また、彼は「位板」（一枚ものの木主）のみを作って使うが、「陥中」（木主の表の「粉面」を取った後の本体に細長く抉り込まれ、死者の実名などが書かれた部分）は特に作らない。

東京大學術期刊資料庫

27 秋山高志「立原翠軒宛柴野栗山書簡集（一）」（『目白大学人文学部紀要　地域文化篇』、第8号、2002年）、66頁。記号は筆者、以下同断。

立原翠軒からの書簡が確認できないので詳細は分からないが、恐らく翠軒は『喪祭儀略』中の木主に関する記述に不満があって、ほかに明解はないかそれを栗山に問いただしたのだろう。それを受けて栗山は上記のように答えたのである。

石碑

木主のほかに、翠軒は石碑についても栗山の意見を求めた。それは、碑文をいかなる順序（右回りか左回りか）で記すべきかをめぐる議論である。栗山の返書は下記の通りである。

刻**其**左転及後右（坊本作右後、恐非——割注）而周焉。

扨又、題神主ノ儀節

顕妣其封某氏神主（**其**下左旁皆書曰——割注）孝子某奉祀

（中略）



家礼首巻神主図

大抵古来左右ニ迷候ハ本其左と其字有之候故、其とハ碑ヲサシテ言、人ノ左ニ而ハ無之と申説有之候故、或ハ地道ハ右ヲ尊フナトト申曲説起り候事と被存候。其ト有之候てもヤハリ人ノ向ひて見候方之左ノ事に紛ハ無之事と奉存候。其証拠ハ神主ノ奉祀ニ題候処も其左と有之候へ共、図にハヤハリ神主ノ右ニ題シ有之候[28]。

臺大學術期刊資料庫

[28] 前掲秋山高志「立原翠軒宛柴野栗山書簡集（一）」、76 頁。

朱子『家礼』「喪礼」には、墓所の「石碑」についての記述がこのようにある。つまり、「用司馬公説、別立小碑、但石須闊尺以上、其厚居三之二、圭首而刻其面、如誌之蓋、乃略述其世系名字行実而刻於其左、転及後右而周焉」[29]という。そして、木主の書入れについては、『家礼』の「題主」儀に、「執事者設卓子於霊座東南、西向、置硯筆墨。對卓置盥盆帨巾如前。主人立於其前、北向。祝盥手、出主、臥置卓上、使善書者盥手、西向立、先題陥中。父則曰:「宋故某官某公諱某字某第幾神主」。粉面曰:「皇考某官封謚府君神主」。下其左旁曰:「孝子某奉祀」」[30]とある。すなわち、二人の議論はまさに上記『家礼』引用文の下線部をめぐってなされたものである。

要するに、石碑の碑文を記す順序のことであるが、「其の左に刻む」とは果たして石碑自身の左なのか、それとも（人が石碑に）向かって左なのか。そのことに対して、栗山は朱子『家礼』の神主図を引き合いに出して、神主中の「孝子某奉祀」という文言は「其の左」に記されるものである。よって、「其の左」とは明らかに向かって左にほかならない、というのである。

なぜ翠軒は碑文を記す順序のことについて栗山に尋ねたのか。恐らく水戸藩の瑞龍山墓所にある朱舜水墓の碑文の記し順、そして林鵞峰『泣血余滴』に記載されている荒川氏神主の書式図と関係していよう。というのも、舜水墓の碑文は石碑自体の左、後ろ、右との順で記されている。また、荒川氏神主の書式図では、「孝子林恕奉祀」という言葉は前掲家礼首巻神主図と違って、神主自体の左に書かれているのである[31]。翠軒はこの先行した 2 つの書式が朱子『家礼』の規定と相矛盾していると見て、栗山の意見を求めたのであろう。

---

[29] 吾妻重二彙校『朱子家禮宋本彙校』（上海：上海古籍出版社、2020 年）、家禮第四、135 頁。

[30] 吾妻重二彙校『朱子家禮宋本彙校』、家禮第四、133 頁。

[31] 荒川氏神主の書式図については、吾妻重二「日本における『家礼』の受容―林鵞峰『泣血余滴』、『祭奠私儀』を中心に―」（『東アジア文化交渉研究』3、2010 年 3 月）、29 頁を参照。また、吾妻が指摘しているように、神主自体の左に「孝子某奉祀」と記したのは、朝鮮儒者・李退渓『自省録』の説に基づいたものである（37 頁）。

ちなみに、時代が下るが、栗山に師事した大蔵謙斎（1757-1844）はのちに翠軒の依頼を受けて、水戸藩の『喪祭儀略』に対して修正の意見を提示した。翠軒はその意見を参照して内容を校訂し、そして同書の「定本」を作ったのである[32]。

ところで、栗山は村士玉水（1729-1776）の著作『二礼儀略』のために序文（「二礼儀略序」、1791 年）を寄せている。玉水は村士淡斎（1700-1772、崎門の三宅尚斎の門人）の子であるが、稲葉迂斎（1684-1760）に師事した。そして、栗山の昌平黌の同僚・岡田寒泉（1740-1816）の師でもあった。栗山は、終りを慎み遠きを追う喪祭二礼を実行しようとする人々のために『二礼儀略』をまとめた玉水の意をよく汲み取って、序文を書いた。そこには、「喪祭礼之大者也、先王本情起文、後賢順理修儀、其書具存、可稽而依也。今為人子、此之不稽、而挙父母精魄、一委之浮屠之手、任彼之所為已。乃燒香一拝之外、余無所事、而謂吾能慎終、吾能追遠、則余不信也。（中略）村士翁行蔵所輯二礼儀略、其斟酌時宜、庶幾乎不失情理矣」[33]とある。こうしたことから窺えるように、栗山は儒教喪祭礼の重要性を認めている。また、『阿藩喪祭儀』[34]を書いて徳島藩の喪祭儀礼について論述し、儒教儀礼の具体的実践に強い関心を見せている。

1788（天明 8）年正月、栗山が幕府の儒官に抜擢されたため、その藩儒の職務は弱冠 16 歳の養子・碧海（1773-1835、栗山弟の貞穀の子）が継いだ。碧海は昌平黌に入学し、「師友の薫陶切磋」を受けて本格的に学問の道に進んだ[35]。その勉学の期間中に西国を遊歴し、そして父栗山の友人で肥後熊本の儒者・辛島塩井（1754-1839）について学んだ。1803（享和 3）年、既に学識を備え一人前の儒者になっ

[32] そのことについては、田世民「水戸藩の儒教儀礼書『喪祭儀略』と『喪祭式』について」（『第 8 回徳川国際シンポジウム要旨集』、東京：公益財団法人徳川ミュージアム、2016 年）、特に 167-170 頁を参照のこと。
[33] 柴野栗山「二礼儀略序」、村士玉水『二礼儀略』、吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇　八』（大阪：関西大学出版部、2019 年）、193-194 頁。
[34] 未見。国文学研究資料館「国書データベース」によれば、同書の著作注記は「近世漢学者著述目録大成による」（https://kokusho.nijl.ac.jp/work/1932281?ln=ja）とある。
[35] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、405 頁。

臺大日本語學報期刊資料庫

た碧海であるが、若殿の斉昌（治昭二男）の侍講を務め、そして生涯を通じて心を尽くして仕えた。その甲斐もあって、斉昌は後に蜂須賀氏歴代の「随一の好学の藩主」となった[36]。こうした和やかな君臣関係は、父栗山が治昭を補佐したことに匹敵するものであろう。

十一代藩主治昭は 1814（文化 11）年 3 月 24 日に逝去し、享年 56 であった。一連の葬送儀礼の中で、儒者の増田哲次と立木新助らが列席した（後述）。翌年 3 月 23 日、次の日の小祥祭を迎えるために、正式な木主「栗主」改題の儀式が行われた。この仕事は柴野平次郎（碧海）が担当したが、治昭の栗主は、陥中が「故従四位下左近衛少将阿淡二州太守源穆公諱治昭字敬止神主」、粉面が「顕考穆公源府君神主」と書き入れられた[37]。24 日の小祥祭において碧海は祝役を担い、そして下記の祝文を奉読した。

維
文化十二年歳次乙亥三月丁亥朔
越廿有四日庚戌孝子源斉昌使弟昭順
敢昭告于
顕考故従四位下左近衛少将兼阿淡
二州太守源穆公霊日月驚迫奄
及小祥攀慕永遠重増荼裂
敢用清酌庶羞祇薦常事
吉主新成喪主將蔵伏惟
尊霊舎旧従新是憑是依尚
饗[38]。

安達洋は『蜂須賀家家臣成立書并系図共』（家中が役務経歴をまとめ製作し、徳島藩に提出した報告書）に基づいて、墓所「萬年山」にかかわる表（図 1）を作っている。その表を見ると、治昭の葬祭儀礼の項目中に柴野碧海の名が見えないが、あるいは資料不全のせい

36 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、413 頁。
37 『穆公様御収御用掛奥御小性手許控　三』（国文学研究資料館収蔵歴史アーカイブズデータベース所収「阿波国徳島蜂須賀家文書」）、画像番号 269。
38 『穆公様御収御用掛奥御小性手許控　三』、画像番号 274。

高木博志 研究資料庫

で抜けたものであろう。しかし、前述したように、碧海は斉昌の幼い頃から侍講として仕え、その教育補導に努めた。さらに、父栗山の衣鉢を継いで久しく藩内学問所の学政に携わった碧海は、徳島藩で高い地位と実力を有するのみならず、文壇でも名を馳せていた。特に、治昭、斉昌と2代の主君と深い信頼関係を築いてきた碧海だからこそ、栗主の改題と祝文の奉読といった役目を担ったのも当然であろう。

表4 「萬年山」にかかわる表

No.	年月日	名	御用
1	天明五(1785)十二月十五日	立木信憲	10代重喜9女 御収御用
2	天明七(1787) 七月廿七日	立木信憲	10代重喜5男 御収御用
3	〃 十二月廿七日	立木信憲	10代重喜11女 御収御用
4	寛政二(1790) 正月十四日	立木信憲	10代重喜11男 御収御用
5	寛政五(1793) 四月十九日	立木信憲	10代重喜13女 御収御用
6	享和元(1801)	増田希哲	11代治昭4女 御収御用
7	〃 十月廿日	増田希哲	10代重喜 御収御用
8	〃 廿二日	立木信憲	10代重喜 御収御用
9	享和二(1802)	増田希哲	10代重喜夫人伝 御収御用
10	〃	増田希哲	以降 御祠堂御用向一巻
11	〃 十二月十八日	増田希哲	10代重喜 御廟山御用
12	文化元(1804)	増田希哲	富田御社造立 御神名御文字選奉
13	文化十一(1814)三月廿四日	増田希哲	11代治昭 御収御用 御石碑認
14	〃	立木信共	11代治昭 御収御用
15	文政三(1820) 四月廿三日	立木信共	完梁院(?) 御収御用
16	天保五(1834) 正月廿四日	合田立礼	11代治昭3男 御収御用
17	天保十三(1842) 二月八日	立木信周	貞心院(11代治昭の側室) 御収御用
18	〃 十一月廿七日	立木信周	13代斉裕夫人量 御収御用
19	安政六(1859) 八月四日	立木信周	於巻(12代斉昌の側室?) 御収御用 碑面誌石認
20	〃 九月十三日	立木信周	12代斉昌 御収御用
21	〃	柴野惟喬	12代斉昌 御収御用
22	〃 十月十二日	立木信周	〃 碑面誌石認
23	〃 十月廿四日	岡本知充	13代斉裕夫人量 小祥御祭御用
24	〃 十一月廿四日	岡本知充	〃 大祥御祭御用
25	安政七(1860) 九月十三日	立木信周	12代斉昌 小祥御祭御用 御神主認御用
26	万延元(1860) 正月廿二日	岡本知充	13代斉裕夫人量 禫御祭御用
27	〃 廿三日	岡本知充	〃 祔御祭御用
28	文久元(1861) 九月十三日	立木信周	12代斉昌 大祥御祭御用
29	〃	柴野惟喬	〃 大祥御祭御用
30	〃 十四日	立木信周	〃 御神主御改題御用
31	〃 十五日	立木信周	〃 祔御祭御用

『蜂須賀家家臣成立書并系図共』より作成

図1（安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開—『成立書』を中心に—」、30頁）

ちなみに、詩文に優れた碧海は文壇で顔が広く、岡田墨樵（1742-1810）や坪井虹山（?-1846）らの詩友と交わった。就中、蜂須賀

臺大學術期刊資料庫

菩提寺の興源寺の主僧で京都出身の玉澗禅師（1771-1856）とも親しく、「終生の交情」を持ったという[39]。

五、徳島藩の喪祭儀礼に関わった他の儒者たち

合田氏

徳島藩でいち早く藩儒の役目を担ったのは合田晴軒（1638-1722。名は昌因、京都の儒者・三宅鞏革斎の次男）という人物である。彼は 1661（寛文元）年の 24 歳で久世大和守広之の推挙により、徳島藩の四代藩主光隆（1630-1666）に儒臣として出仕した。晴軒は京都に在住したままであったが、しばしば藩主に随従して阿波と江戸に赴いた[40]。

合田氏の三代目は合田如玉（1725-1781、名は温、晴軒の孫昌孝の子）であるが、藩主重喜に目を掛けられ、よく政策の建議などをした。如玉は妻が京都の儒者・皆川淇園（1734-1807）の姉という縁もあって、淇園と親しく交わった。合田氏は 6 代に亘って徳島藩の文教に力を尽くしたが、しかも文化の中心地の京都に在住していたため、徳島藩の文教に種々の便宜を提供することができた[41]。なかでも特記すべきは、如玉が柴野栗山と那波魯堂（1727-1789）の徳島藩儒への出仕を斡旋したということである。

管見の限りでは、合田氏歴代の儒者は徳島藩主の葬祭儀礼に関わった形跡がなかった。しかし、徳島大学附属図書館所蔵蜂須賀家家臣団家譜史料データベース[42]によれば、1834（天保 5）年正月 24 日に治昭三男の規四郎が死去した時、合田氏五代目の立礼は葬儀の執事を担当したと分かった（図 1 参照）。ちなみに、吾妻重二の実地調査によれば、合田晴軒らの一族の墓地は京都市北区の円城寺に現存

[39] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、470-473 頁参照。
[40] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、5 頁。
[41] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、32 頁。
[42] データベースのホームページのリンクは https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/dbhachi/hachi.html である。

徳島大学附属図書館貴重資料庫

し、そして親戚関係にある三宅氏の墓所も同じ区域内にあるという[43]。

増田氏

増田氏も徳島藩儒者の一家として重要である。増田立軒（1673-1743）は藩医の増田策菴（？-1629）の次男であり、徳島で生まれた[44]。立軒は京都の儒者中村惕斎（1629-1702）の弟子であり、長年その門下で学んだ。そして、惕斎の亡き後にしばらくその学塾を受け継ぎ、そしてその著作に訓点をつけて出版した。周知のように、中村惕斎は近世日本の著名な経学者であり、とりわけ礼学の造詣が深く、『慎終疏節通考』や『追遠疏節通考』などを著した。立軒はその学問を継承し、『慎終疏節聞録』と『追遠疏節聞録』を編んだ[45]。ここで留意すべきは、立軒が惕斎の妻の富田氏の葬儀に関わり、そして師の遺命に従ってその葬儀の「相礼」（儀礼の進行を助ける者）を務めたということである[46]。

立軒は 1708（宝永 5）年 36 歳の時に藩主の綱矩（1661-1730）に儒者として任命され、そして藩主と世子の吉武の侍講を務めた。立軒は 18 年間に亘って吉武のために学問を講義して教育したが、惜しくも吉武が早世した。享年 34 である。立軒は奉悼の詩並びに序を作って弔った[47]。立軒は藩主綱矩に信頼され、その命で『渭水聞見録』を編纂した。同書は蜂須賀正利（藩祖正勝の父）から七代宗員（1709-1735）の逝去まで約二百年間に及ぶ、歴代君公の事績と歴史を編年体でまとめたものである[48]。竹治貞夫は徳島藩最後の儒者の岡本斯文（1843-1919）が 1915（大正 4）年に著した「徳島藩学事略」

---

43 詳しくは、吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から（四）」（『関西大学東西学術研究所紀要』56、2023 年 7 月）を参照。
44 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、48 頁。
45 以上の 4 冊はともに吾妻重二『家礼文献集成　日本篇四』（大阪：関西大学出版部、2015 年）に収録されている。
46 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、52 頁と 60 頁参照。
47 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、66 頁。
48 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、71 頁。

臺大機構典藏期刊資料庫

（大正 5 年徳島県発行の『御大典記念阿波藩民政資料』所収）の内容を引用して次のように指摘する。要するに、徳島藩の寺島学問所では中村惕斎の『鈔説』や『示蒙』などの書を尊崇し、そして 1791（寛政 3）年の開校から幕末に至るまで増田立軒の築いた学風を遵守していたという[49]。そこから窺えるように、徳島藩の文教における立軒の役割は大きかった。

増田氏四代の匡芳（？-1791）と五代の衡亭（希哲、1770-1841）はともに柴野栗山に師事していた。衡亭は栗山が幕府に仕えてからの門人であり、後に儒者として出仕し、柴野碧海とともに徳島藩の学政を担った。好学の藩主だった治昭と斉昌に仕えた衡亭であるが、碧海と交替して藩主の参勤に随従して徳島と江戸を往来し、そして藩の教育事業に力を入れた。ただし、詩文で世に知られ、そして傑作『枕上集』を著した碧海に対して、衡亭はほとんど詩文や著作を遺さなかった[50]。父衡亭の学を受け継いだ双悟（道太郎）は碧海に師事するとともに、江戸昌平黌に遊学し、古賀侗庵（1788-1847）の門を叩いた[51]。

衡亭は先祖の立軒以来の礼学を中心とした学問を受け継ぎ、そして柴野栗山の薫陶をも受けたが、彼は徳島の葬祭儀礼において重要な役目を果たした。例えば、十代藩主重喜が逝去した時（諡号元公）、衡亭は立木信憲（後述）とともに儒者として葬儀の執事を務めた。一周忌「小祥」の前日、元公の栗主に衡亭が書入れを行い、その書式は陥中が「故従四位下侍従兼阿淡二州太守大炊頭源元公諱重喜字公熙神主」、粉面が「顕考源元公神主」であった[52]。そして、小祥の当日に衡亭が祝役を務め、下記のような祝文を奉読した。

維

享和二年歳次壬戌十月己亥朔越二十日

[49] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、115 頁。
[50] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、106 頁。
[51] 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、107 頁。
[52] 『元公様元夫人様御祭儀奥小姓手許控　三』（国文学研究資料館収蔵歴史アーカイブズデータベース所収「阿波国徳島蜂須賀家文書」）、画像番号 226。

国文学研究資料館資料庫

戊午孝子治昭敢昭告于
顕考故従四位下侍従兼大炊頭元公之霊日月
驚迫奄及小祥
攀慕永遠重増荼裂敢用清酌庶羞
祗薦常事吉主新成喪主将蔵伏惟
尊霊舎旧従新是憑是依
尚
饗[53]。

また、衡亭は 1802（享和２）年に重喜夫人（名は伝）の葬儀、および祠堂の儀礼の執事を務めた。そして、1814（文化 11）年十一代藩主治昭が逝去した時に、治昭の墓碑碑文を執筆するなど種々の葬祭儀礼に関わった[54]。以上のことから分かるように、増田衡亭は儒者として徳島藩の葬祭儀礼において大きな役割を果たしたのである。

立木氏

立木氏は徳島藩の葬祭儀礼において多くの役目を担ったいま一つの儒門である。初代の信憲（通称新助、1741-1824）は津田氏の出身であるが、長谷川氏の養子に迎えられ、その後今村氏を継いで立木氏の苗字を譲り受けた[55]。信憲は若い頃京都に遊学し、医学を中心に学んだ。その後、しばらく矢上村（現徳島県板野郡藍住町矢上）で医業を営んだ。1785（天明 5）年 41 歳の時、十代藩主重喜に出仕した。音曲に通じて笛を善く吹く信憲であるが、そのことが重喜の目に留まり、近侍の儒者として招聘される契機となったという。信憲は命を受けて『箏曲考』という書を著したが[56]、那波魯堂と柴野栗山が同書の序を物した。また、信憲の孫の松園の墓誌によれば、信憲は京都で山崎闇斎学派の学を習ったという。なお、『阿波偉人伝』

53 『元公様元夫人様御祭儀奥小姓手許控　三』、画像番号 233-234。
54 『元公様元夫人様御祭儀奥小姓手許控　四』、画像番号 294 以下。また、安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」、30 頁表 4 を参照。
55 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、492 頁。
56 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、493 頁。

臺大學術期刊資料庫

の逸話では、信憲の家に「万巻の蔵書」があり、「博学洽聞」である上に、講義に長けて、「比喩適切、解釈平易、聞くもの悟らざるはなし」と評価が高いとされる[57]。

信憲は徳島藩儒に出仕してから、主君の子弟の教育係を担う傍ら、藩内の葬祭儀礼の仕事をも務めた。例えば、1785（天明 5）年 12 月 15 日、重喜の九女が早世し（諡号実際院）、信憲は葬儀の執事（「御収御用」）を担当した。のち、1787（天明 7）年 7 月 27 日（重喜五男死去、諡号大超院）、同年 12 月 27 日（重喜十一女死去、諡号宣明院）、1790（寛政 2）年正月 14 日（重喜十一男死去、諡号龍珠院）、そして 1793（寛政 5）年 4 月 19 日（重喜十三女死去、諡号幽松院）と、度々藩内の葬儀に関わった。1801（享和元）年 10 月 2 日に、重喜は隠居の富田邸で逝去したが、同 22 日に信憲は増田衡亭（希哲）とともにその葬儀の執事を仰せつけられた。翌年 12 月 18 日にその褒賞として「御小袖」ひとつを賜った[58]。

1814（文化 11）年 3 月 24 日に十一代藩主治昭が逝去した。70 歳の信憲は既に隠退し、葬儀執事の役目はその養子の信共（信憲の生家津田氏の出身であるが、津田良輔信良の弟）と増田衡亭が務めた。しかし、信憲は長年の経験を買われたと思われるが、衡亭とともに墓地の下見をするように命ぜられた[59]。また、納棺の礼「大斂」の際に徳島藩の上下一同が拝礼を行う儀式があったが、その列席者リストに「隠居人」としての信憲の名が確認できた[60]。竹治貞夫も指摘しているように、立木信憲は主として重喜の近侍として仕えたが、「その多くの子女（重喜には一六男一五女があった）の教育係と夭死者の葬儀係りを勤めて」[61]いたのである。

---

57 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、496 頁。
58 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、495 頁。また、安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」、30 頁表 4 を参照。
59 『穆公様御収御用掛奥御小性手許控　壱』、画像番号 7。
60 『穆公様御収御用掛奥御小性手許控　壱』、画像番号 34。
61 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、495-496 頁。

岡本知充

図 1 に見えるように、徳島藩の葬祭儀礼に関わった儒者には、上記の柴野氏、合田氏、増田氏、立木氏のほかに、岡本知充（1808-1881）という人物がいる。知充は岡本晤叟の名で、通称は堅三郎、別号に晤室、樸蔭、近南がある。竹治貞夫によれば、知充は 1827（文政 10）年 20 歳のとき、父遜斎が死去して学問所司読の職を継ぎ、そして 1856（安政 3）年 49 歳で儒員として抜擢されたという[62]。知充が徳島藩の葬祭儀礼に関わった事績は図 1 所載の情報から知ることができるが、具体的な内容についてはさらに考察する必要がある。ただし、柴野碧海について学んだとされる知充であるが、ほかの儒者たちは高取りの藩儒であるのに対して、彼は無足身分である。ともかく、知充はその学識と才能を買われて、「権威が必要となる職務」[63]に関わったのであろう。ちなみに、前述した徳島藩最後の儒者だった岡本斯文（1843-1919）は知充の長男である。斯文は父の衣鉢を継いで、徳島藩の助教を経て、徳島中学初代校長、徳島女子師範校長、徳島女学校長などを勤めた教育者である。また、「徳島藩学事略」（『阿波藩民政資料』）を編んでいる。

上に見てきたように、徳島藩歴代の藩主が逝去した後、一連の葬祭儀礼が行われたが、藩を挙げて多くの家中が動員された。儀礼は主に近侍の諸臣と儒者らが務めた。例えば、十一代藩主治昭（穆公）の葬儀に、万年山の墓所の下見を仰せつけられたのは、「御年寄・蜂須賀宜佑、御側目附・今枝岱右衛門、御儒者・増田哲次・立木新助、

---

62 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、542 頁。また、安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」によれば、同年に江戸八丁堀藩邸に「長久館」が設置され、漢学をはじめ蘭学・算術・武術などが教えられた。そして藩儒は「漢学教授方」として岡本知充、柴野惟喬、橋本惟孝、安芸恭雅らが関わったという（38 頁）。

63 安達洋「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」、34 頁。安達によれば、「御用を勤めたうち、無足身分の藩儒は岡本知充だけであり、他の七名がすべて高取の藩儒というのはどのような理由による区別であろうか。推測するに、葬式や祭儀など、より広く藩士諸民に知らしめ、権威が必要となる職務においては、知識だけではなく身分や家柄も優先される傾向にあったのかもしれない」（34 頁）。

御作事奉行・牧官五郎」[64]の面々である。また、神主の書入れや祝文奉読などの仕事は専ら儒者が務めた。さらに、治昭の葬儀では、増田衡亭と立木信共はそれぞれ「霊幄題主」と「祝役」の役目を担った。ただし、埋葬後の「虞祭」では、「初虞」は立木信共が祝役として行ったが、その後の「再虞」から「五虞」は他の執事の藩士が祝役を務めた。再虞は長濱栄次、三虞は東根彌太郎、四虞は里見文蔵、そして五虞は上田応二郎が行ったという具合である[65]。そこから見て取れるように、重喜が万年山墓所を開闢し、儒教葬祭儀礼を行ってから、治昭以降の藩主も家中と藩儒たちの協力のもと、その儀礼をよく行い続けた。徳島藩においてもはや整った儒教儀礼制度が成立したのである。

なお、徳島藩にいま一つの儒門・那波氏があるが、葬祭儀礼にはさほど関わっていなかったらしい。例えば、那波魯堂は葬儀には直接参加していなかったものの、早世した重喜の子・義功と治昭の長男・昭尹のために碑銘（「蜂須賀子業府君碑銘」）と墓誌銘（「蜂須賀亮天公子墓誌銘」）を執筆したのである[66]。

【附表】徳島藩葬祭儀礼に関わった儒者たち（本稿で取り上げた者に限る。出現順）

氏名	生没年	事績
柴野栗山	1736-1807	8代宗鎮のための「阿波僖恵公誄」を執筆したり、『阿藩喪祭儀』を書いている
柴野碧海	1773-1835	11代治昭の栗主改題、小祥祭祝役などを勤める
合田立礼	未詳	11代治昭3男御収御用
増田衡亭	1770-1841	10代重喜・重喜夫人、11代治昭などの葬祭儀礼に関わる

64 『穆公様御収御用掛奥御小性手許控　壱』、画像番号7。
65 『穆公様御収御用掛奥御小性手許控　二』、画像番号92、104、107、110、112、114参照。
66 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』、170頁。

臺大學術期刊資料庫

立木信憲	1741-1824	10 代重喜の子女数人、重喜、11 代治昭などの葬祭儀礼に関わる
立木信共	未詳	11 代治昭御収御用
岡本知充	1808-1881	13 代斉裕夫人の祭儀に関わる

六、おわりに

先述したように、蜂須賀重喜は佐竹家から養子に迎えられて、阿波徳島藩の十代藩主に就任した。重喜は同藩従来の政治体制の改変を図るべく、宝暦・明和の改革を行った。しかし、養子藩主であるだけに家中からの反発抗争も大きく、重喜の強い意志で改革断行に踏み切られたが、家中から隠居強制を求められるような事態へと発展した。結局、幕府の側から隠居命令が下され、事態が決着したのである[67]。

しかし、重喜の儒教的礼制作りは本気だった。25 万 7 千石を領した阿波徳島藩であるが、近世を通じて四国最大の雄藩である。同藩には、合田氏・増田氏・柴野氏・那波氏・立木氏といった錚々たる儒者を輩出した藩儒 5 氏が仕えてきた[68]が、その意味で早くから儒教的礼制を作るための土台があった。だが、万年山墓所を造営し、そして家中を動員して本格的に葬祭儀礼を進めたのは重喜の時代を待たねばならなかった。先に見たように、「阿淡二州太守族葬墓域」の石碑に「葬むるに必ず礼を守りて、浮屠を用いず」とあるように、重喜は儒教的葬祭儀礼の価値を認めていた。そして、5 度の虞祭が行われたことが表しているように、従四位下侍従の官位を持つ国持大名（「大夫」）という身分に見合った礼制作りに取り組んだのである。その営みは近世の好学大名による儒礼受容の広がりとして捉え

[67] 重喜の政治改革を素材に阿波蜂須賀家における君臣抗争について、笠谷和比古「近世の大名諸家における主君「押込」の慣行」（『史林』69 巻 1 号、1986 年）を参照。

[68] 詳しくは前掲竹治貞夫「阿波の藩学」、特に 5 頁以降を参照。それによれば、徳島藩の藩儒は、4 代藩主光隆が寛文年間に京都の儒者合田昌因を招聘したのが始めであった（5 頁）。

臺大圖書館期刊資料庫

ることもできよう。また、徳島藩の葬儀では水戸藩のそれを参考にして点主儀が採り入れられたように、水戸藩の葬祭儀礼は近世大名の儒礼受容においては大きなモデルとしてあったのである。

ところで、上に見てきたように、柴野栗山は水戸藩の立原翠軒と交友が深く、しばしば往来した書簡の中で木主や石碑など葬祭儀礼に関わる事柄をめぐって議論を交わした。水戸藩と徳島藩との儒教儀礼文化の深化に両氏は確かな足跡を残したのである。また、徳島藩の儒者諸氏に関する考察で分かったように、合田氏は最初に同藩に出仕した儒門であり、藩内の文教事業に大いに役立った。しかし、京都に在住していたこともあってか、同藩の葬祭儀礼にはさほど関わっておらず、主に増田氏をはじめ、立木氏と柴野氏らがその役目を務めた。彼らは藩主と世子らの子弟の侍講を担当するのみならず、藩内学問所の教育を担った。そして、主君とその家族が人生の最後に直面した際に、儒者として終りを慎み遠きを追う喪祭礼の知を活かして大いに活躍していたのである。

蜂須賀重喜による万年山墓所の造営を嚆矢とする阿波徳島藩の儒教葬祭儀礼であるが、本稿では同藩の儒者たちの役割を含めてその一端を検討してみた。重喜以降、徳島藩では万年山墓所と興源寺墓所の両墓制を続けており、その意味で儒教と仏教の間は葬祭儀礼に関して緊張関係を持ちながら一定のバランスを保っていたといえよう。しかし、近代に入るとその在り方が変化を迎えた。第十四代で最後の藩主だった蜂須賀茂韶（1846-1918）は、廃藩置県の後に華族となって東京に移住した。それに先立ち、茂韶は1871（明治4）年に徳島城内の祠堂を廃止してそれを藩祖家政（1558-1639）が祀られている国瑞彦神社（現徳島市伊賀町）に移した。徳島藩における儒法祭祀の終焉である[69]。また、茂韶死後、その葬儀は重喜以来の儀礼次第が見えないのみならず、仏教色を多く増したものとなった。例

臺大學術期刊資料庫

[69] 前掲露木亀太郎『蜂須賀家之祭祀法（神佛儒）縁由』、頁数無表示。

えば、その葬儀記録によると、祭壇付近に仏教各宗の僧侶が読経するための「諷経席」が設けられたのである[70]。

ともあれ、今後、重喜以降の葬祭儀礼の史料を収録した前記の「阿波国徳島蜂須賀家文書」について、さらに精査して同藩の葬祭儀礼の全体像を明らかにしていきたい。

【付記】本稿は国立台湾大学高等教育深耕計画—核心研究群計画「近世日本藩国大名礼制的思想文化研究」ならびに科技部専題研究計画「日本十七世紀以降礼儀文化的伝播与転化——水戸藩及徳島藩為中心」（MOST 108-2410-H-002 -047 -MY2）による成果の一部である。2 名の査読の先生より建設的な修正意見を多数賜り、厚く御礼申し上げる。

【参考文献】（年代順）

研究書・研究論文

宮脇仲次郎編（1906）『訓点栗山文集』宮脇仲次郎発行、香川県丸亀中学校蔵版

露木亀太郎（1936）『蜂須賀家之祭祀法（神佛儒）縁由』露木亀太郎発行

笠谷和比古（1986）「近世の大名諸家における主君「押込」の慣行」『史林』69-1

竹治貞夫（1989）「阿波の藩学」『徳島大学国語国文学』2

竹治貞夫（1989）『近世阿波漢学史の研究』風間書房

大和武生（1995）「近世阿波の学問と儒学者」、渭陽会編『東洋の知識人—士大夫・文人・漢学者—』朋友書店

水戸史学会（2002）「史料翻刻『慎終日録』」『水戸史学』56

臺大學術期刊資料庫

70 「大源院殿葬儀録下編二」（国文学研究資料館、収蔵歴史アーカイブデータベース「阿波国徳島蜂須賀家文書」）、画像番号 82。

秋山高志（2002）「立原翠軒宛柴野栗山書簡集（一）」『目白大学人文学部紀要　地域文化篇』8
徳島市教育委員会社会教育課編（2005）『史跡徳島藩主蜂須賀家墓所保存整備計画書』徳島市教育委員会
吾妻重二（2008）「水戸徳川家と儒教儀礼―葬礼をめぐって―」『東洋の思想と宗教』25
吾妻重二（2010～2024）『家礼文献集成　日本篇　一～十二』関西大学出版部
吾妻重二（2010）「日本における『家礼』の受容―林鵞峰『泣血余滴』、『祭奠私儀』を中心に―」『東アジア文化交渉研究』3
安達洋（2011）「近世徳島藩藩儒の成立と展開―『成立書』を中心に―」『鳴門史学』25
藪田貫（2011）「近世日本における儒教と儒葬墓について―徳島藩蜂須賀家の万年山儒葬墓を中心に―」吾妻重二編『泊園記念会創立五〇周年記念論文集』関西大学出版部
田世民（2012）『近世日本における儒礼受容の研究』ぺりかん社
松原典明（2012）『近世大名葬制の考古学的研究』雄山閣
徳川真木監修・徐興慶主編（2014）『日本徳川博物館蔵品録Ⅱ　徳川光圀文献釈解』上海古籍出版社
桑原恵（2016）「養子藩主の祖先祭祀～万年山墓所をめぐって～」『史窓』46
田世民（2016）「水戸藩の儒教儀礼書『喪祭儀略』と『喪祭式』について」『第8回徳川国際シンポジウム要旨集』公益財団法人徳川ミュージアム
松原典明編著（2018）『近世大名葬制の基礎的研究』石造文化財調査研究所
松原典明編（2020）『近世大名墓の考古学――東アジア文化圏における思想と祭祀』勉誠出版
吾妻重二彙校（2020）『朱子家禮宋本彙校』上海古籍出版社

臺大學術期刊資料庫

松川雅信（2020）『儒教儀礼と近世日本社会――闇斎学派の『家礼』実践』勉誠出版
田世民（2020）「近世日本知識人的遊學與社集――以柴野栗山及其交遊網絡為例的探討」張藝曦主編『結社的藝術：16-18 世紀東亞世界的文人社集』聯經出版
吾妻重二（2023）「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から（四）」『関西大学東西学術研究所紀要』56

データベース

国文学研究資料館、収蔵歴史アーカイブデータベース「阿波国徳島蜂須賀家文書」

臺大學術期刊資料庫